



# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：日本手の外科学会

広報委員会

### 第48回日本手の外科学会を 開催して

第48回日本手の外科学会  
会長 土井 一 輝

#### 目 次

- 第48回日本手の外科学会を開催して
- The 4<sup>th</sup> ASSH-JSSH Combined Meeting  
印象記
- ベトナム手の外科学会 印象記
- 新特別会員紹介
- 新任教授紹介
- ハンドギャラリー(児島コレクション)
- 各種委員会報告
- お知らせ =学会案内=
- 編集後記

第48回日本手の外科学会学術集会を平成17年4月21日(木)、22日(金)の両日、本学会主催の教育研修会を23日(土)に、海峡メッセ下関で開催いたしました。

地方開催のため交通、宿泊の面での不便さや学会前日に発生した博多沖地震にもかかわらず、1300余名の多くの会員の皆様のご参加をいただき、心より感謝申し上げます。

本学術集会では「手の外科専門医を目指して」をスローガンに掲げました。本学会で手の外科専門医制度を平成18年度の第49回総会で発足目標とすることが確認されたことは意義あることと考えております。昨今、専門医制度の意義が問われておりますが、手の外科領域においても、教育制度、施設、専門医制度が間もなく確立される予定です。この基本理念を元に本学会を企画いたしました。広島鉄道病院 院長 生田義和先生には特別講演「手の外科教育と基本手術手技」と題して、手の外科専門医教育の在り方をご指導いただきました。特別講演の他、パネルも手の外科専門医に必須な知識、技術に関した項目を専門教育研修講座として6題を取り上げました。最先端の技術・知識だけでなく、専門医に不可欠な技術の習得は必要と考えます。形式は変わっても、技術指導を含めた教育研修講座は今後も継続していただきたいと存じます。

また、私の長年の臨床経験より、「EBM」と「QOL」も避けて通れない問題と考え、本学会で初めて両テーマを取り上げました。EBMは標準的医療を目的とした方策であります。外科系疾患にはEBMは馴染まないと言われてきましたが、手の外科学におけるEBMは他領域の疾患とは異なったアプローチの仕方があるものと考えます。医師の知識、技術の優劣によらない普遍的治療体系を確立するのも教育制度の一環と考えます。しかし、今回の学会が手の外科関係では初めてEBMを提唱したため、まだ、一般には馴染みが薄いようでありました。今後の臨床医学にはEBMは必須であります。また、シンポジストの落合直之先生が指摘されたように、公表バイアスの問題と臨床医の経験に基づくexperience based medicineも軽視してはいけなると考えます。

外科医とはかく自分の技術におぼれ、手術の成功のみに興味を示し、運動器疾患の治療の目的である患者様のADLの改善は無視しがちで、自分達の行っている治療が果たして患者様の生活に有用なものになっているのか検証することを忘れてはいけなると考えます。このようなことから、「機能評価法とQOL」の問題も取り上げました。このQOLの問題については多くの先生方からご賛同をいた

だき、EBMと共に、臨床研究の成績発表には不可欠の評価であると再認識いたしました。

今回は、臨床演題を中心とした学術集会でありましたが、科学、技術面のみからの情報交換でなく、教育、EBM、QOLと臨床医学の本筋を会員が認識できたことに本学会の意義があったと自負しております。

最後に地方での開催と、不慣れな地方病院のスタッフによる手作りの学会であったため、参加者の皆様には何かとご不便、不行き届きな面が多々ありましたことをこの場をお借りしましてお詫び申し上げます。

## The 4<sup>th</sup> ASSH-JSSH Combined Meeting 印象記

広島県身障者リハビリテーションセンター  
水 関 隆 也

去る3月19日から22日の間、The 4th ASSH-JSSH Combined Meetingが米国手の外科学会の主催でハワイ州ワイキキ、ヒルトンハワイアンヴィレッジホテルで開催されました。米側はAmerican Society for Surgery of the Hand会長であるTerry Light先生、日本側は理事長である中村蓼吾先生両会長の下、米側実行委員長Marybeth Ezaki先生そして日本側は私が窓口となって実務を担当させていただきました。日本側の準備は、米国主催ということで国際委員会（金谷文則委員長）が対応させていただきました。

有料参加者（家族参加者を除く）は日本から117名、米国から85名、オーストラリアから5名、スウェーデンから2名、フランス、インド、イスラエル、英国から各々1名の計213名でした。会は19日夜の歓迎会から22日夜の晩餐会にいたるまで終始友好ムードのなかで進行しました。前回同様、会員間あるいは家族間の親睦を深めるというもうひとつの目的のため、学術プログラムは午後2時までにて全て終了し、午後はゴルフにテニス、シュノーケリング等々、ハワイの青空の下、自由時間を楽しみました。

学会はKeynote lecture, Symposium, 一般口演発表およびポスター展示で構成されていました。Keynote lectureは米側からRichard Berger先生、Richard Gelberman先生、日本側から児島忠雄先生、生田義和先生の四名によって行われました。Berger先生は“Advances in care of arthritis of the thumb”, Gelberman先生は“Nerve problems”と題してそれぞれの分野の解剖、治療法の変遷、現在における治療法の選択等について私見に偏ることなく紹介されました。児島忠雄慈恵医大名誉教授は“Congenital Anomalies”と題して講演されました。多合指症、裂手症に対する様々な形成術を彼オリジナルの皮弁、皮切をおりまぜて紹介されました。最後に先天異常手の形成術には美的センスと細かな手術手技が大切なことを強調し講演を終えました。生田義和広島大名誉教授は“Development of microsurgery”の題の下、自らのマイクロサージャリーの歴史、すなわち日本のマイクロサージャリーの歴史を振り返り、Ikuta clamp, CO<sub>2</sub> laser assisted microsurgeryなど彼が開発に係わった数々の手術機器を紹介されました。さらに脈管系の再建のみならず組織移植におけるmicrosurgeryの役割を展望しました。

Symposiumには“Advances in the care of arthritis in the upper limb”, “Distal radius fracture”, “Scaphoid fractures and nonunions”の3つのテーマが取り上げられました。いずれのテーマも万人の合意する答えのないテーマであり、興味深い議論がありました。

一般口演には60題（米側から29題、日本側から31題）が、ポスターには71題が採用されました。その内容は多岐に渡り興味深いものが多かったのですが、時間の関係でポスターの質疑応答の時間がと

れなかったのが残念でした。他に Traveling Fellow Session も設けられ、米国の Bunnell Fellow として日本を訪問したことのある Seitz, Chung 先生、そして今年度の fellow である Shin 先生が発表しました。日本側からは日米 Traveling Fellow として米国を訪問した松下、岡島、柿木先生が発表し、米国で ASSH 会員から受けた暖かい歓迎に謝意を示し友好を深めました。

会の終わりに Light 会長、Ezaki 先生から「ご協力ありがとう。次回も楽しみです」、というお言葉をいただきました。この言葉を日本からの全参加者と日本側組織委員会（国際委員会）にそのままお伝えしたいと思います。次回の本合同会議は日本側がホストの順番です。2010年3月、ハワイでの開催を目標に日本手の外科学会で準備が進められる予定です。大成功であった第3回と同様、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、会を主催していただいた米国手の外科学会および事務局、そして年度末の多忙な時期にもかかわらずご参加いただいた全国の先生方と、終始的確なアドバイスをいただいた山内裕雄順天堂大名誉教授に、日本側組織委員会（国際委員会）を代表して深甚なる謝意を表します。



学会場に集まった日米首脳

## ベトナム手の外科学会 印象記

東邦大学第2整形外科  
戸部正博

2005年4月8日にホーチミンシティで開催されました第6回ホーチミンシティ手の外科学会に参加してまいりましたので、報告させていただきます。

私と南川義隆先生は2003年の第4回ホーチミンシティ手の外科学会より参加させていただいており、今回は日手会の中村蓼吾理事長・田嶋光先生・西川真史先生・南川義隆先生と私の5人で参加致しました。

ベトナムは全国規模の手の外科学会はなく、北部のハノイ・中部のフエ・南部のホーチミンに分れて活動を行っております。ホーチミンシティ（以下HCMC）手の外科学会は約150名の会員で構成されており、HCMC市内の整形外科外傷センターの手の外科医が中心となって運営しています。

今回の学会の会長である Dr. Thai は昨年のおでんで行われた第5回 APFSSH に参加して、大変感銘を受けたそうで、前年までは整形外科外傷センターの講堂を使用していましたが、今回は HCMC 市内のエクアトリアルホテル（5ツ星ホテル）で行われ、コーヒープレイクやピュッフェ形式のランチタイムまで新設されておりました。APFSSH を参考にしたとのこと。

今回の学会はわれわれ日本人5人の他にアメリカから2人の Dr. も参加していたため、前回までは現地の Dr. はベトナム語のスライドを使用していましたが、今回のスライドは全て英語でした（言葉はベトナム語でしたが）。Dr. Thai の話では、APFSSH に参加して、母国語だけの発表ではダメだと思ったそうです。

海外の学会に参加する際に思うことですが、自分の発表以外、内容が全くわからないようでは参加している意味もありません。外国人を招く以上、同時通訳も良いのですが、スライドだけでも英語にすることが望ましいと思います。来年から Japan Hand Fellowship を新設する日手会もスライドだけ

でも英語にしてみてもいいでしょうか？

さて、今回の学会の主題は橈骨遠位端骨折でしたので、中村理事長は「橈骨遠位端骨折変形治癒の治療」を、田嶋先生は「創外固定を中心とした日本の橈骨遠位端骨折治療の歴史」を、西川先生は「intra-focal pinningによる治療」を、私は「方形回内筋を温存した掌側plate治療」をそれぞれ15分ずつ、講演いたしました。

また、学会の前日にはvoluntary hand surgeryのため、われわれ5人で整形外科外傷センターを訪問し、朝のカンファレンス・手術・患者さんの診察を行いました。手術では満足な医療設備のない中で、西川先生に手動ドリルによるintra-focal pinningを行っていただきました。また、下の写真は中村理事長が指の拘縮がある若い女性の診察を現地のレジデントに教えながら行っているところです。

今年で戦後30年を迎えるベトナムでは、現在の日本では見なくなった外傷後の変形・手指の拘縮などの障害を持った患者さんがとてもたくさんいます。また、手の外科の教育や機材も含めた病院設備も遅れており、まだまだ外国からの技術指導や物資などの支援を必要としております。

次回のHCMC手の外科学会は2006年3月に「手の骨折・腱損傷」を主題に行われる予定で、アメリカ・韓国・香港・日本の手の外科医も参加する予定です。このような活動に興味のある方はご一報下さい。



日本からの参加メンバーとDr.Thai(左から3人目)



診察指導中の中村理事長

## 新特別会員紹介

### 富田 泰次



その奇妙な形の細長い母指がピクピクと動いて、何かをつまもうとしているのを見た時の驚きは衝撃的なものでした。それは昭和40年、慈恵医大の学部3年生のポリクリの時間に、丸毛英二助教授の本邦何例目かの母指化術の術後の患者さんを診た時のことで「そうか！母指がなくなって不自由している人でもこんな方法で救うことができるのか」と強い感銘を受け、これが手の外科を志すきっかけとなったものです。

青医連の騒動のあと、国試を2回もボイコットしたあげくに2年遅れで入局したところ、手の外科グループでは、丸毛助教授と児島講師達の独協出身の、ドイツ語での語尾の変化の誤りを指摘される辛いカンファレンスが待っておりました。しかし、それも束の間で、直ぐにお二人共、新たに形成外科教室が開講されて移られてしまい、室田講師が代わってチーフとなられました。同時に伊丹教授からは人工関節の研究テーマを与えられました。手の外科を離

れ難く、遂に今日までずっと二足のワラジを履いて過ごしてしまい、結局のところどちらも物にならずに終わってしまいました。

1974年、奈良医大でマイクロサージャリーの3週間の研修コースを終了後、1976年に、玉井先生を団長とする手の外科医師団のアメリカ訪問に参加して各地を訪問しましたが、どこでも当時は玉井先生達の *microsurgery* は、症例数でも内容でもアメリカを凌いでおり、私達は何か誇らしい気持ちになっていました。

ところが、1979年に Louisville に留学してみると、その症例数の多さと、内容の豊富さに圧倒されてしまいました。時には一晩に4件もの切断指再接着手術が同時に行われていたり、1日に2～3例の *toe-transfer* があつたりして、当時スタッフになったばかりの Dr.Tsai も大活躍でした。幸いに、その当時は訪れる Fellow 達は、ほとんどが *microsurgery* の経験がないため、私は昼夜を問わず手術に引っ張り出され、おかげで *research fellow* だったにも拘らず準スタッフ的な扱いで、多くの臨床経験を積むことができました。

手の外科学会とのかかわりでは、入局後は手の外科グループでは東京手の外科同好会という持ち回りの研究会に参加する義務がありました。山内先生、矢部先生、室田先生、池谷先生、松井先生、内西先生、鳥山先生などが中心となって運営されておりましたが、毎回患者さんを連れて参加し、皆で症例検討をしたもので、大変勉強になりました。この会は、後の東日本手の外科研究会に発展したことはご承知の通りです。

日本手の外科学会とのかかわりでは、第17回の伊丹会長の際には、虎ノ門の教育会館で開催しましたが、参加人数も少なく、室田助教授と私の二人だけで手弁当で簡単に準備が出来たように思っております。第30回の室田教授の会長の際には、その準備もかなり大変で、学会が急激に発展しつつある時期であったように思います。また、室田教授は用語委員会の、最初のグループの委員長であったため、まったくの無から用語集を作らねばならず、医局員が、洋雑誌などから手の外科用語をひとつひとつ拾い出すところから始め、その後の2～3年間、日曜の午前と午後を潰して数名の委員で議論して、最初の用語集の発行にこぎつけました。私は毎回参加して裏方を努めさせていただき、その後は用語委員にもなりましたが、今は立派な用語集となり、密かに嬉しく思っております。

手の外科の歴史を慈恵医大に例えますと、第9回の片山教授の頃は、屈筋腱はつなげればよしという段階でしたが、これを第1世代としますと、その後、Dr.Milford のところで研鑽を積まれた室田教授達の *atraumatic technique* の時代は第2世代で、その後の *microsurgery* が導入された時代が第3世代と言えるのではないかと思います。しかし、これもすでに四半世紀を経てやや停滞しているように思われます。

本年3月に Louisville を訪れた際には、年間8,000～10,000例の症例の中で *microsurgery* は約4%にすぎないと Dr.Tsai は言っておりました。時代は確実に変わりつつあるように思います。これからの第4世代には何が出てくるのでしょうか、代替物の先進医療の時代になるのでしょうか、楽しみに見守りたいと思っております。

(文中の年代、症例数などには記憶違いがあるかと思われませんが、ご容赦下さい。)

## 新任教授紹介

### 名古屋大学手の外科学教室教授に着任して

名古屋大学大学院医学系研究科機能構築医学専攻  
運動形態外科学手の外科

平田 仁



中村蓼吾先生（現日本手の外科学会理事長）の後任として名古屋大学大学院医学系研究科機能構築医学専攻運動形態外科学手の外科教授を拝命し10月1日に着任いたしました。三重大学のある津市から名古屋市は電車では1時間、車だと50分程度の距離です。大都市圏で暮らす先生方にとっては通勤圏内の移動といったところかと思えます。名古屋大学はJR中央西線鶴舞駅のすぐ前にあり、名古屋駅から電車で8分と非常に交通の便のよいところに立地しています。三重県は地政学的には名古屋を中心とする東海文化圏に属し、古来より名古屋文化の影響を色濃く受けてきた地域です。三重大学のある津市は県庁所在地

地ではありますが、大きな建物といえば県庁と大学病院程度しかなく、戦後を通じて人口もほとんど変動しない落ち着いたはあるがダイナミズムにかけた人口16万人前後の小地方都市です。住民は町への愛着は非常に強いのですが、街の中にはお国自慢が見当たらず、郷土を語る際にも伊勢神宮、松阪牛、ミキモト真珠など文化的には多少異なる地域のものを引き合いに出す、人柄は良いがいささか貪欲さに欠ける傾向があります。このため多くの若者は流行を求めて名古屋へと足しげく通います。私も研究会だけでも東海集談会、東海手の外科カンファレンス、東海マイクロサージャリー研究会、東海外傷研究会、などなど実に多くの機会があり、これまでも頻繁に名古屋を訪れてきました。その為名古屋大学の先生方には研修医のころから公私にわたり大変にお世話になってきました。このような背景で三重大学から名古屋大学へと異なる組織の間での異動でありながら、私の中では同じ医局に属する病院間での異動のような違和感の少ないものです。

私は昭和57年に三重大学医学部を卒業しました。卒業と同時に三重大学整形外科学教室に入局しましたが、1ヶ月後には静岡市民病院に派遣されることとなり、静岡の地で2年間の研修医生活を送りました。当時は肩関節、膝関節の治療に興味があり、昭和59年に大学病院に戻されてからも膝肩班を自認していました。私は元来手先の不器用な人間で、解剖実習の際にも多くの友人から「平田は外科医には向かないな」とよくからかわれていました。実際に細かいことは苦手で、手の外科だけは避けて通りたいと思っていたのですが、神の悪戯か当時助教授であった藤澤幸三先生の不在の際に当直医として処置をした指輪損傷の不適切な治療が大問題となり、昭和62年に手の外科班に配属されてしまいました。藤澤先生が平成元年には三重大学から10kmほど離れた鈴鹿回生病院の院長に栄転され、不十分な技術と知識しか持ち合わせない状態で一人取り残された感じでしたが、困る症例があると東海手の外科カンファレンスに患者さんを連れて参加し、藤澤先生だけではなく三浦隆行先生、木野義武先生、中村蓼吾先生、井上五郎先生、浜松医大の長野 昭先生、海南病院の西源三郎先生、岐阜県立病院の鈴木 康先生といった方々に教を請いながら何とか臨床をこなしてきました。その一方で故荻原義郎教授のご指示で平成元年に1ヶ月間広島大学に内地留学をした際に越智光夫教授（当時は講師）の研究を拝見し、いたく感激し、末梢神経再生をテーマに自分でも研究を始めました。その後内田淳正教授の強力な後押しもあり大学院の研究テーマに加えて頂いた事から非常に多くの若手の先生と様々な研究をすることができました。また、学会活動を通じて牧 裕先生、伊藤聰一郎先生、高山真一郎先生、仲尾保志先生、岡島誠一郎先生、を始め非常に多くのすばらしい友人を得ることができました。日手会では神経の研究ばかりを発表したためしばしば研究ばかりをしているのでは

と聞かれることがありますが、私は手術も好きな方で、昨年もマイクロと手の外科の手術を中心に年間に400例あまりの症例を執刀しています。三重大学では内田教授のご指導により医師としても研究者としても充実した日々を送らせて頂き大変感謝をしています。

名古屋大学に移籍して2ヶ月近くが経ちスタッフともずいぶん打ち解けていろいろな話ができるようになってきました。堀井恵美子先生は私にとっては広く世界に目が向いた大切な先輩であり、手の外科の師匠でもあります。これまでも多くのことを教えて頂きましたが、就任後も手の外科に対する哲学から手術手技の実際まで幅広く学ばせて頂いています。中尾悦宏先生は徹底的なこだわりを持つ職人気質の手の外科医であり、治療のコツとピットホールについて毎日楽しく議論を続けています。その他にも中村蓼吾先生を慕って手の外科に入局した医員、大学院生が合わせて8人おり、いずれもすばらしい知識と意欲を持った逸材です。まだ、始まったばかりの名古屋での日々ですが、10人のスタッフと毎日手の外科談話に明け暮れ、少しでも新しい手の外科を創出しようと邁進しています。

## ハンドギャラリー(児島コレクション)VI

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

児島 忠雄

### 5. 生活の中の手

#### その1. 装身具

指輪、ブローチ、ネックレス、イヤリング、ネクタイピン、カフスポタンなどの装身具として沢山の手の形のものを作られました。そして、いくつかの指輪をかけておくためのリングスタンド、また、これらの小さな装身具 (trinket) を一緒に置いておくための皿 (trinket dish) なども手をモチーフとして作られています。これらの装身具は英国ヴィクトリア朝時代に華やかな展開をみせ、貴金属や象牙を材料とした高価なものもあります。

指輪をはめるため、第4指は環指 (Ring finger) と呼ばれるようになりましたが、指輪の起源は古く、最も古い伝承はギリシャ神話にあるといわれています。古代エジプトでは魔除けなどの呪術的な意味、宗教的な意味があったといわれています。なぜ、第4指に指輪をはめるかの理由については、いくつかの説があります。指輪は各国で作られたものが11点あります。ブローチ、ネックレス、イヤリング (ピアス)、ネクタイピンなど、合わせて60点ほどの手が展示されています。写真は左から、1920年頃のフランス・リモージュのリングスタンド (母指に指輪がはめられています) と指輪、19世紀の英国のトリンケットデッシュ、19世紀中頃の英国の金の棒を握った象牙製ブローチ、1900年頃のフランスの瑪瑙で作られたネクタイピンです。



## 委員会報告

### 手の外科専門医に向けて

専門医検討委員会委員長

理事長 中村 蓼吾

21世紀入り早5年が経過しました。日頃手の外科の研鑽に励んでおられる会員諸先生のご活躍をお慶び申し上げます。

日本手の外科学会では生田義和前理事長の時代より専門医制度につき検討を重ね、理事会では発足すべきとの合意の下に具体化に努めてまいりました。制度の成案をホームページに掲載するとともに下関での48回学術集会では討論会、展示を行い皆様によく知っていただくよう努力してまいりました。また細則、カリキュラム、研修病院の規定はなお検討中ですが平成18年浜松での第49回学術集会の際の総会に提示、討論、ご承認を頂き制度を発足させたいと考えております。

何故専門医制度かという観点について述べますと、日本手の外科学会は本来、国民の手の外科医療を支え、医療要求がある限り、可能な限り良質の医療を提供する使命を持っています。これを果たすには手の外科医が相当な医療技術（この点は十分に達成してきています）を持つだけでなく、手の外科という専門分野を医学会や社会的に認知してもらう必要があります。この点、日本手の外科学会は大変苦しい状況にあります。日本医学会分科会には長年加盟を申請していますが認められていません。日本専門医認定機構の分類の中にも入れてもらえていません。厚生労働省の来年度のリハビリテーション点数改定原案では手のリハビリは最も点数が低い分類になっています。腱縫合術のなかでも最も難しい手の腱縫合が他部位より低く評価されています。また国民の多くは手の外傷を受けても、専門家がいることを知りません。こうした状況を打破し、主要都市に手の外科センターが開設できるようにし、手の外科専門医療がより受けやすい基盤を作ることが、一つの目標です。このためには日本における手の外科の認知度を医学会や社会で向上させる必要があります。一朝一夕で達成される目標ではありませんが、先輩の諸先生も努力されたようにあらゆる機会をとらえ認知度を高める必要があります。専門医制度もこの観点からぜひ整備する必要があります。たとえすぐ公的な認知はなくても、手の外科専門医を社会が認知するようになればよいと思います。また専門医制度さえない分野では話にならないという場面が予想されます。

また専門医制度は十分な修練をつんだ専門医を社会に提供する責務があります。このためよりいっそうの教育、研修体制を整えることも大切です。

専門医制度規則案の要点を述べますと、第5条で申請資格を規定しています。日本整形外科学会または日本形成外科学会の認定医で日本手の外科学会会員歴が5年以上必要です。また手の外科修練実績、手術経験、研修実績、業績を必要とします。その詳細は細則で定めていますが、全体として評議員選出に関する細則より緩く、より沢山の先生が申請できる内容です。また発足時より2年間、専門医制度の運営を円滑に行うため、特例措置を行います。全体で300～500名の専門医が生まれることが期待でき、評議員がいない県にも専門医が生まれるものと推察しています。10年以上の正会員の先生には60例の手術例の症例一覧と10例の手術例の病歴要約、手の外科論文5編（1編は査読制度があること）および日本手の外科学会報誌の論文3編以上が認定の必要条件です。なお症例は11種類の分類中6項目以上を含む必要があります。評議員、名誉会員、特別会員については5編以上の論文と3編以上の日本手の外科学会雑誌論文の提出が必要です。詳細はホームページでご覧下さい。

発足すると、色々不備な点が表面化すると思いますが、手の外科をとりまく状況は先に述べました

ようにあまくなく、早急な発足が第一義的に重要です。専門医制度にふさわしい教育研修制度など順次整え、内容の豊かな制度に発展すべく努力を続けたいと考えます。会員の諸先生のご支援のもと専門医制度の発足、発展をお願いする次第です。

## quick DASHについてのご紹介

機能評価委員会

担当理事

委員長

藤 哲  
今 敏 彦

本年7月にAAOSから正式認可された quickDASH 日手会版についてご紹介致します。

DASH (Disabilities of The Arm, Shoulder and Hand) 日手会版は昨年 AAOS から正式に認可されていますが、「全く行わないので想像すら出来ない質問項目がある」とか、「項目数が多いので答えてもらえない」等の意見がありました。特に、老人に欠損値が多いことも判明しました<sup>1)</sup>。もっと手軽な quickDASH も使用したいとの要望に応じて機能評価委員会による quickDASH 日手会版作成のきっかけとなりました。早急に取りかかった結果、quickDASH 日手会版は original の quickDash を含め3番目になりました。

full DASH と同様、quickDASH は2部の質問表から構成され、メインの機能障害・症状に関する質問項目と仕事、スポーツ・芸術活動に関する選択項目があります。

full DASH では23項目ある機能障害についての質問は、quickDASH では8項目に、full DASH では7項目ある症状についての質問は quickDASH では3項目に減っています。仕事、スポーツ・芸術活動に関する選択項目に関しては full DASH と全く同じです。やり方は簡単です。被検者は、評価前1週間の自分の状態を、5段階の選択肢から選んで番号をチェックします(実際に行っていない動作については、想像して回答します)。上肢全体の能力低下を評価するため、左右や障害の部位とは無関係に、その動作がどの程度可能であったかを評価します。

各質問項目には、1～5点が配点され、機能障害・症状スコアは採点の合計を回答項目数で割り、この平均値から1を引いて25をかけて100点満点に換算します。ただし、欠損項目は1つまで許容され、欠損項目が2つ以上の場合には計算できません。

選択項目のスコアは採点の合計を4で割り、これから1をひいて25をかけて100点満点に換算します。ただし、選択項目の場合は欠損項目が1つでもあれば無効です。

両スコアとも、点数が高いほど障害程度が大きいことを意味します。

だれでも download ができ、許可なく使用できます (<http://www.dash.iwh.on.ca/>)。

World standard の評価法として、full DASH と同様 quickDASH は今後広く用いられる方法であると確信しております。

1) T Imaeda, S Toh, et al. for the Impairment Evaluation Committee, Japanese Society for Surgery of the Hand: Validation of the Japanese Society for Surgery of the Hand Version of the Disability of the Arm, Shoulder, and Hand (DASH-JSSH) Questionnaire. *J Orthop Sci* 10 (4) :353-359, 2005.

## .....お知らせ.....

### 手の外科研修施設一覧

研修内容などの詳細は日手会ホームページをご覧ください。

研修希望者は各研修施設に直接申請、交渉を行ってください。教育研修委員会および日本手の外科学会は研修医の申請、および研修に関しては一切、関与いたしません。

施設番号	施設名	研修責任者	住所	TEL
1	北海道大学医学部附属病院整形外科	三浪明男	060-8638 札幌市北区北15条西7丁目	011-716-1161
2	大阪労災病院	橋本英雄	591-8025 堺市長曾根町1179-3	072-252-3561
3	山口県厚生連小郡第一総合病院	土井一輝	754-0002 山口県吉敷郡小郡町下郷 862-3	083-972-0333
4	新潟手の外科研究所	吉津孝衛	950-0965 新潟市新光町1-18	025-283-0306
5	東京手の外科/スポーツ医学研究所	山口利仁	192-0002 八王子市高月町360	0426-92-1115
6	埼玉手の外科研究所	児島忠雄	355-0072 東松山市石橋1721	0493-23-1221
7	聖隷浜松病院 手の外科・マイクロサージャリーセンター	斎藤英彦	430-8558 浜松市住吉 2-12-12	053-474-2222
8	鈴鹿回生病院	藤澤幸三	513-0836 鈴鹿市国府町112-1	0593-75-1212
9	医療法人あかね会 広島手の外科・微小外科研究所	津下健哉	730-0811 広島市中区中島町9-5 三津石ビル3階・4階	082-544-1227
10	大阪厚生年金病院	正富 隆	553-0003 大阪市福島区福島4-2-78	06-6441-5451
11	名古屋掖済会病院整形外科	渡邊健太郎	454-0854 名古屋市中川区松年町4-66	052-652-7711
12	弘前大学医学部附属病院整形外科	藤 哲	036-8562 弘前市在府町5	0172-33-5111
13	広島大学整形外科	越智光夫 石田 治	734-8551 広島市南区霞1-2-3	082-257-5232
14	奈良マイクロサージャリー・手の外科研究所（西奈良中央病院内）ならびに奈良県立医科大学整形外科	玉井 進	631-0024 奈良市百楽園5-2-6 （西奈良中央病院）	0742-43-3333
15	新潟県立瀬波病院リウマチセンター	石川 肇	958-8555 村上市瀬波温泉2-4-15	0254-53-3154
16	山口県立中央病院	酒井和裕	747-8511 防府市大字大崎7	0835-22-4411
17	愛野記念病院	貝田英二	854-0301 長崎県南高来郡愛野町3838-1	0957-36-0015
18	慶應義塾大学病院整形外科	池上博泰	160-8582 東京都新宿区信濃町35番地	03-3353-1211
19	信州大学整形外科	加藤博之	390-8621 松本市旭3-1-1	0263-37-2659
20	大阪医科大学整形外科	阿部宗昭	569-8686 高槻市大学町2-7	072-683-1221

## 日本手の外科学会 教育研修ビデオライブラリー

希望者（会員に限る）には実費（1本3,000円）で頒布いたしますので、事務局へお申し込みください。

巻数	タイトル	講師
1	腱移行術	津下 健哉
2	手の外科医に必要な皮弁の挙上法	土田 芳彦 他
3	橈骨遠位端骨折に対する種々の手術的治療法	斎藤 英彦 他
4	鏡視下手根管開放術	奥津 一郎 他
5	手関節鏡	玉井 和夫 他
6	Dupuytren 拘縮の手術 有茎血管柄付き DIP 関節を利用した指 PIP 関節再建のコツ	福居 顕宏 黒島 永嗣
7	Herbert Screwによる舟状骨偽関節手術	井上 五郎
8	腕神経叢損傷全型麻痺の再建手術： Double Free Muscle Transfer法(新版)	土井 一輝
9	リウマチ手関節の手術	政田 和洋
10	母指再建術①②	川端 秀彦 他
11	母指再建術③④	稲田 有史 他
12	遊離筋膜脂肪弁移植を用いた先天性近位橈尺骨癒合症の授動術	金谷 文則
13	手の外科手術手技 (1)	津下 健哉 木森 研治
14	手の外科手術手技 (2)	津下 健哉 木森 研治
15	手の外科手術手技 (3)	津下 健哉 木森 研治
16	手の外科手術手技 (4)	津下 健哉 木森 研治
17	指切断の被覆法	土井 一輝 他
18	手の外科手術手技 (5)	津下 健哉 木森 研治
19	手の外科手術手技 (6)	津下 健哉 木森 研治
20	手の外科手術手技 (7)	津下 健哉 木森 研治
21	Kienböck病の手術	安田 匡孝 他
22	PIPJ骨折牽引療法 指尖部切断再接着 尺側手関節部痛に対する尺骨楔状短縮骨切り術	黒島 永嗣 服部 泰典 吉田 竹志
23	手の外科手術手技 (8)	津下 健哉 木森 研治
24	手の外科手術手技 (9)	津下 健哉 木森 研治
25	手の外科手術手技 (10)	津下 健哉 木森 研治

## 会員特別頒布のご案内

日本手の外科学会では、各委員会にお願ひし、会員の活動に役立つ種々の事業を進めております。ご希望の会員には、実費で頒布いたしますので事務局宛お申し込みください。

在庫に限りのあるものもございますので、ご希望の方はお早めにお申込ください。

### 教育研修ビデオライブラリー 全25巻（各3,000円（税込）：送料込）

（教育研修委員会）

### 手の外科学用語集 改訂版第2版（南江堂）（1冊3,500円（税込））

日手会誌への投稿だけでなく、日常のいろいろな場面で役立つ用語集が改訂版第2版として発売になっております。

（用語委員会）

### 手の機能評価表 第3版（1冊1,000円（税込））

会員のご要望が多かった手の機能評価表 第3版を増刷いたしました。

（機能評価委員会）

### ネクタイ（1本 3,000円；送料200円）数量限定

スーツとも相性も良く、大好評です。デザインは日手会ホームページ上でご覧いただけます。数には限りがありますのでお早めにお申込みください。

（広報委員会）

### タイタック、ネクタイピン、ハットピン（1個800円；送料200円）数量限定

故藤巻悦夫先生が第42回日手会の際、記念品として作成されたものをメモリアルとして復刻させました。是非とも学会にお出かけの際などにお付けください。

（広報委員会）

### 携帯ストラップ 3種（1個600円；送料200円）数量限定

携帯電話の画面を拭く便利なストラップを作成しました。グー・チョキ・パーの3種類でお手頃価格となっております。お土産などにも是非どうぞ！

（広報委員会）

## 関連学会・研究会のお知らせ

### 第18回日本肘関節学会学術集会

会 期：平成18年1月27日(金)  
 会 場：名古屋市／ウェスティンナゴヤキャッスル  
 会 長：中村 蓼吾（中日病院名古屋手の外科センター）  
 問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有)ヒズ・ブレイン内  
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510  
 E-mail：nagoya2006@elbow-jp.org  
 詳細は <http://www.elbow-jp.org/>

### 第23回中部日本手の外科研究会

会 期：平成18年1月28日(土)  
 会 場：豊橋市／豊橋市公会堂  
 会 長：井上 五郎（豊橋市民病院整形外科）  
 問合せ先：〒441-8570 豊橋市青竹町八間西50 豊橋市民病院整形外科  
 TEL:0532-33-6111 FAX:0532-33-6177  
 E-mail：hand23:@chubu.name  
 詳細は <http://www.jssh.gr.jp/cjhand/>

### 第27回九州手の外科研究会

会 期：平成18年2月4日(土)  
 会 場：北九州市／北九州国際会議場  
 会 長：酒井 昭典（産業医科大学整形外科）  
 問合せ先：〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1  
 産業医科大学医学部整形外科内  
 TEL:093-691-7444 FAX:093-692-0184  
 E-mail：27k-hand@mbox.med.uoeh-u.ac.jp  
 詳細は <http://www.jssh.gr.jp/khand/>

### 第20回東日本手の外科研究会

会 期：平成18年2月10日(金)  
 会 場：甲府市／ウェルシティ甲府  
 会 長：浜田 良機（山梨大学整形外科）  
 問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有)ヒズ・ブレイン内  
 TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510  
 E-mail：ejhand2006@jssh.gr.jp  
 詳細は <http://www.jssh.gr.jp/ejhand/>

#### 第49回日本手の外科学会学術集会

会 期：平成18年4月20日(木)～21日(金)

会 場：浜松市／アクトシティ浜松

会 長：長野 昭 (浜松医科大学整形外科)

テ ー マ：末梢神経障害の治療戦略

招待講演 Prof. Michael B. Wood 「Heterotopic nerve transfers in the upper limb」

Prof. Rolfe Birch 「The British experience of peripheral nerve surgery」

国際シンポジウム 「Peripheral nerve surgery in East Asia」

Poong Taek Kim (Korea), Jianguang Xu (China),

Panupan Songcharoen (Thailand), Aymeric Lim (Singapore)

シンポジウム

1. 末梢神経再生の基礎的研究の進歩
2. 末梢神経麻痺の治療の進歩
3. Musician's hand
4. 手関節尺側部痛の診断と治療
5. 手の腫瘍の診断・治療の進歩

パネルディスカッション

1. 母指CM関節障害
2. 伸筋腱断裂の手術
3. 前腕両骨骨折の治療と問題点
4. 肘不安定症の診断と治療

ビデオシンポジウム

1. 神経修復術
2. 複合組織移植

問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (有)ヒズ・ブレイン内

TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510

E-mail：hamamatsu2006@jssh.gr.jp

詳細は <http://www.jssh.gr.jp/49jssh/>

#### 第45回手の先天異常懇話会

問題症例などを持ち寄っていただき自由に討論する会です多くの方々の参加をお待ちしております。会の進行を円滑に行うため呈示していただく症例数と概要をあらかじめ把握しておく必要がありますので、前もって応募していただくようお願いいたします。発表された症例は懇話会での症例検討の内容を含めた簡単なまとめ(原稿用紙2枚、図2～3枚)を後日提出していただき、日手会誌に掲載いたします。

会 期：平成18年4月20日(木)または21日(金) ランチョン(予定)

会 場：浜松市／アクトシティ浜松 (第49回日本手の外科学会学術集会 会場)

会 費：1,000円 ※昼食を用意いたします

応募方法：平成18年3月末日までに郵送またはe-mailで症例の概要を写真と共に下記あてお送りください。なお、症例数の関係で当日検討できなかった症例につきましては、先天異常委員会で検討のうえ、後日報告させていただきます。

郵 送 先：〒355-0072 埼玉県東松山市石橋1721

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所

担当：福本恵三

E-mail：handsurg@seikei.or.jp

世 話 人：日本手の外科学会先天異常委員会 委員長 福本恵三

※当日はPCによるプレゼンテーションになります。各自PCを持参してください。プロジェクターとの接続には、一般的な15ピンのコネクター以外は対応不能ですので、必要に応じて変換ケーブルも持参してください。またPCのトラブルに備えてプレゼンテーションをCD-ROMまたはUSBメモリーで持参してください。スライドによる発表は受付いたしません。

※発表時間は5分です。発表者の方は必ず時間までに会場受付にお越しください。

### 第29回末梢神経を語る会

会 期：平成18年4月21日(金) 18:00～20:00

(予定；第49回日本手の外科学会学術集会終了後)

会 場：浜松市／アクトシティ浜松 コンgressセンター会議室

テ ー マ：肘部管症候群、手根管症候群重症例における腱移行術の適応と手術手技プログラム：

1. 肘部管症候群 司会：金谷 文則, 加藤 博之
  - 1) 肘部管症候群の重症例の電気診断と腱移行術の適応  
信田 進吾 (東北労災病院)
  - 2) 肘部管症候群の重症例に対する Neviaser 法の手術手技と術後成績  
根本 孝一 (防衛医科大学校)
  - 3) 肘部管症候群に対する機能再建術  
斎藤 英彦 (聖隷浜松病院)
2. 手根管症候群 司会：池田 和夫, 加藤 博之
  - 1) 手根管症候群重度例の術後成績と母指対立再建術  
長岡 正宏 (駿河台日大病院)
  - 2) 高齢者の重度手根管症候群に対する一期的腱移行の意義  
日高 典昭 (大阪市立総合医療センター)
  - 3) 手根管症候群重度例に対する Camitz 変法  
金谷 文則 (琉球大学)

当番世話人：金谷 文則, 加藤 博之, 池田 和夫

### 日本手の外科学会第12回春期教育研修会

会 期：平成18年4月22日(土)

会 場：浜松市／アクトシティ浜松 中ホール

問合せ先：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 (侘)ヒズ・ブレイン内

日本手の外科学会事務局

TEL 052-836-3511 FAX 052-836-3510

E-mail：info@jssh.gr.jp

